

医療大学と付属病院の取組みが 茨城新聞1面トップで紹介されました



1月20日
土曜日

茨城新聞社

最先端リハビリ研究へ

神経科学の知見応用

県立医療大

県立医療大（阿見町阿見）は神経科学の知見を応用した最先端のリハビリテーションの研究に本格的に乗り出す。リハビリによる体の機能の回復と脳の活動の変化のつながりを明らかにする研究で、より効率的なリハビリの導入や確立を目指す。昨年12月下旬には産業技術総合研究所（東京都千代田区）の情報・人間工学領域と、同研究に関して技術開発や臨床研究に協力する連携協定を結び、実用化に向けた動きを加速させる。

同大によると、研究に乗り出すのはニューロサイエンス（神経科学）に基づく「ニューロリハビリテーション」と呼ばれる分野で、国内では研究が緒に就いたばかり。磁気共鳴画像装置（MRI）などの発達により、脳の活動のモニタリングが可能になってきたことなどに伴って研究が可能になった。

リハビリによる脳の活動の変化と、体のまひの回復の結び付きなどを研究すること、神経伝達を利用したリハビリロボットの開発

同大付属病院は、従来の運動訓練のリハビリとニューロリハビリテーションを組み合わせ、将来的にはより個人の状態に合ったリハビリを提供したい考え。同病院神経内科臨床教授の河野豊医師は「最先端の神経科学の知見で、これまで以上に患者に即したリハビリを選択できるようなれば」と期待する。同病院と同研究所は昨年

12月下旬、「神経科学的研究知見に基づくリハビリテーション技術の開発」を重点課題に位置付け、連携協

定を結んだ。協定は、研究施設・設備の相互利用や人材交流・育成面での協力を確認した。具体的には、脳の活動のモニタリングなどについての臨床研究や、ロボットの実用性の検証などで協力が見込まれる。協定期間は来年3月31日までで、合意がなされれば、1年単位で更新する予定。（成田愛）

2018年1月20日付け茨城新聞から転載